

ミュウミュウ

アート・バーゼル・パリのパブリックプログラム 公式パートナーとして 3 年連続で参画
アリス・ディオップによる特別プロジェクト『Geste de Consolation (慰めの身振り)』を発表

2026 年のアート・バーゼル・パリのパブリックプログラム 公式パートナーとして、ミュウミュウはフランス人映画監督アリス・ディオップを迎え、『Geste de Consolation (慰めの身振り)』を制作しました。

本プロジェクトは、フランス経済・社会・環境評議会 (Economic, Social and Environmental Council) の本部であり、ミュウミュウのファッションショー会場としても知られるイエナ宮を舞台に開催されます。

ミウッチャ・プラダの招待により実現した『Geste de Consolation』は、ディオップが 2025 年に Miu Miu Women's Tales のために制作した映画『Fragments for Venus』から始まった対話を継承するものです。本作では、黒人女性がこれまでどのように表象されてきたのか、そしてそうした表象がいかに今日においても重要な課題であり続けているのかをさらに掘り下げています。

ディオップにとって初となる展覧会キュレーションとなる本プロジェクトでは、彼女の映像的な視点をスクリーンの外へと広げ、物語性を帯びた空間へと展開します。映画、写真、彫刻、詩、ダンス、音楽、パフォーマンスをひとつのモンタージュとして組み合わせ、出会いと感情が交差する場を創出します。こうした試みを通じて、『Geste de Consolation』は、映画とアートが互いに影響を与え続ける関係へのミウッチャ・プラダの長年の関心を受け継ぐと同時に、ミュウミュウが一貫して見つけてきた女性たちの人生、経験、歴史、そして語られてこなかった物語への探求に新たな章を開くものです。

『Geste de Consolation』は、映画監督としてのアリス・ディオップの作品全体を貫く問いを出発点に、それをマルチメディアによる空間表現として展開します。

ディオップは次のように語っています。

「私のキュレーションでは、それぞれ異なる分野で活動する黒人女性アーティストたちによる“慰めの行為”を中心に据えたいと考えています。それは、何世紀にもわたる美術史の中で私たちに向けられてきた、フェティッシュ化されたまなざしを修復するためです。」

『Geste de Consolation』は、黒人の創造性を讃える祝祭的なコーラスです。本展は、私たちが向き合う表象そのものによって形づくられてきた「見る」という行為について、そして、過去の表象がいまなお現在に影を落とし、そのあり方を形づくっていることについて、共に考える場となります。

ディオップは、「私を癒やし、豊かにしてくれた」女性たちを集め、互いに結びついた 4 つの空間を巡る旅へと来場者を導きます。それぞれの空間は、異なる表現領域や声、建築的な雰囲気や軸を構成されています。

その旅は、南アフリカ出身のアーティスト、ザネレ・ムホリによる写真作品から始まります。その先に続く空間では、アリス・ディオップによる 2 面スクリーンの映像インスタレーションを展開します。映画監督としての彼女の視点を形成してきたアーカイブ映像や映画の断片がモンタージュされ、暴力を想起させる衝撃的なイメージと、彼女に慰めをもたらしたイメージが交錯します。

この映像空間を抜けると、来場者は《Chambre à soi (自分だけの部屋)》へと進みます。アーティスト、メアリー・リー・ベンドルフのモチーフをあしらった色鮮やかなパッチワークカーペットの上に広がるこの空間は、リビングルームとライブラリーを兼ね備えています。イエナ宮の壮大なコンクリート建築の中に設けられた、親密で家庭的な空間です。

一般公開されるこの大規模なライブラリーには、ディオップの知的形成に大きな影響を与えた書籍が並びます。同時にそれは、21 世紀を生きるひとりの黒人女性の思考の軌跡を描き出す場ともなっています。《Chambre à soi》は、来場者が夢を描き、創造し、自らの解放のビジョンを育むための空間です。

展覧会の中心では、このライブラリー空間がパフォーマンスの舞台へと姿を変えます。ペンダ・ディウフ、ゾラ・ニール・ハーストン、ジュン・ジョーダン、オードリー・ロード、マリー・ンディアイ、ゼイディ・スミスらのテキストが、ペンダ・ディウフ、アリス・ダ・ルス・ゴメス、ラティファ・ラービシ、セフォラ・ポンディ、ダヴィデ・クリステル・サンヴェ、ベティ・チョマンガらによって日替わりで朗読されます。

またステージでは、コートジボワール出身の振付家ナディア・ブグレによる作品『**Prophétique**』を、本プロジェクトのために再構成した特別版が、6 人のダンサーによって上演されます。さらに、シカゴを拠点とする作曲家・ミュージシャンのエンジェル・バット・ダウイドが、自身のアンサンブル「**Sistazz of the Nitty-Gritty**」とともにパフォーマンスを披露します。

旅の終着点には、シモーヌ・リーによる高さ約 5 メートルのブロンズ彫刻《**Sentinel (Mami Wata)**》がそびえ立ちます。

引き伸ばされた女性像を蛇が取り囲むこの作品は、西アフリカに伝わる力強い水の精霊「マミ・ワタ」をリーが再解釈したものです。そのイメージはアフリカ各地、そしてディアスポラのコミュニティを通じて広がり、変容を続けてきました。

破壊と創造という両義的な力を備えたマミ・ワタは、ここで相反する性質を持つ守護者として姿を現します。圧倒的な存在感を放ちながらも沈黙を守り、空間全体を見守っているのです。

展覧会全体を通じて、空間演出は「見ること」そのものを建築的な言語として用いています。会場内の随所に設けられた段状の客席は、来場者にディオップの映像を見つめ、パフォーマーを見つめ、互いを見つめ合い、そして最後にリーの彫刻《**Sentinel**》と向き合うことを促します。

さまざまなまなざしが生まれ、交わり、出会います。また、公的な施設を思わせる客席と家庭的な居心地の良さとの対比によって、異なるレベルの快適さや共同性が生み出されています。

ディオップは、『**Geste de Consolation**』そのものをひとつのモンタージュとして構想しています。展覧会を巡る動線は、映画編集においてショットからショットへ切り替わるように、一つの空間から次の空間へと来場者を導きます。

来場者の体験は、直接的な説明によってではなく、作品同士の近接や連なりによって積み重ねられ、そして鑑賞する順序を通じて意味が重なり合い、やがてカタルシスへと導かれます。

音、言葉、声、イメージ。そのすべては、この空間を移動する身体のために丁寧に配置されています。『**Geste de Consolation**』は、記憶と修復をめぐる没入的な旅を提示します。

『**Geste de Consolation**』は、アート・バーゼル・パリのパブリックプログラムの一環として、パリのイエナ宮で開催されます。一般公開は 10 月 21 日から 25 日までで、10 月 20 日にはプレビューを実施します。また、展覧会ガイドツアーのオンライン予約は、10 月 8 日より miumiu.com にて受付を開始しています。

アート・バーゼル・パリの公式プログラムでは、パリ市内の歴史的な会場を舞台に、モダンアートおよび現代アートを代表するアーティストによる展覧会、インスタレーション、大型彫刻キュレーションプロジェクトなどが一般公開されます。

『**Geste de Consolation**』の詳細は、miumiu.com をご覧ください。

アリス・ディオップ

フランス人映画監督・脚本家、1979 年生まれ。静謐でありながら力強い映像表現を通して、アイデンティティ、移民、植民地主義といったテーマを探究しています。彼女の作品は、公の場で十分に語られてこなかった人々の声に光を当てるものであり、社会の周縁に置かれてきた個人の物語を映し出してきました。個人的な経験や記憶を社会的・政治的な視点へと結びつけるその手法により、ディオップは社会的・政治的な問題意識を持つ現代フランス映画を代表する重要な映画作家のひとりとして高い評価を得ています。

2021 年のベルリン国際映画祭では最優秀ドキュメンタリー映画賞、2022 年のヴェネチア国際映画祭では銀獅子賞を受賞。2024 年にはアメリカ映画芸術科学アカデミー (Academy of Motion Picture Arts and Sciences) の会員に招かれました。

主な作品に、『サントメール ある被告』(2022 年)、『私たち』(2021 年)、『Vers la Tendresse』(2016 年)があります。映画制作と並行して教育・研究活動にも取り組み、知識や経験の共有を重視しながら学術分野でも活動を続けています。

また映画監督としての活動と並行して、研究への意欲と知識を次世代へと継承することの重要性への信念を原動力に、学術分野でも活動を続けています。アトリエ・ヴァランの教員を務めるほか、パリ第 8 大学、パリ第 1 大学、コロンビア大学、ニューヨーク大学 (NYU)、イエール大学、ハーバード大学など、フランスやアメリカの大学で定期的にワークショップやマスタークラスを開催しています。

ディオップはこれまでもミュウミュウと協業しており、Miu Miu Women's Tales 第 30 作となる短編映画『Fragments For Venus』(2025 年)の監督を務めました。同作品は 2025 年ヴェネチア国際映画祭の「Giornate degli Autori」部門のオープニング作品として初上映され、その後、ニューヨーク映画祭 (NYFF) および BFI ロンドン映画祭でも上映されました。

現在は、20 世紀文学および人類学の重要作のひとつとされるミシェル・レリスの『幻のアフリカ』に着想を得た新作長編映画の制作に取り組んでいます。

ミュウミュウとアート・バーゼル・パリ

ミウッチャ・プラダによるミュウミュウの根底には、常に女性たちの人生への関心があります。それは、彼女たちの人生、経験や歴史、そして語られることの少ない物語へのまなざしでもあります。そして、その探究はファッションのみならず、カルチャーの領域にも広がっています。

ミュウミュウはアートと現代社会との対話を重要な価値として捉えており、その取り組みの一環として、2024 年よりアート・バーゼル・パリのパブリックプログラム公式パートナーを務めています。

フランス経済・社会・環境評議会の本部であり、ミュウミュウのファッションショー会場としても知られるイエナ宮で毎年発表されるこのプロジェクトでは、第一線で活躍するアーティスト、振付家、パフォーマー、ミュージシャン、思想家たちが集い、既存のジャンルや枠組みにとらわれない実験的な表現を展開しています。

2024 年には、学際的アーティストのゴシュカ・マクガによって構想され、エルヴィラ・ディアンガニ・オセがキュレーションを手掛けた『Tales and Tellers』が初開催され、多様な物語、視点、表現手法を横断し、絶えず変化し続ける女性らしさの概念を探究しました。

2025 年には、アーティストのヘレン・マーテンによる『30 Blizzards.』を発表。舞台・オペラ演出家のファビオ・ケルスティッチと作曲家ベアトリス・ディロンとのコラボレーションにより、彫刻、映像、台本、音楽、振付を融合させた大規模な新作パフォーマンスを上演しました。

これらの大規模なプロジェクトは、アートとアーティストを支援するためにミュウミュウが継続的に展開してきた文化的な取り組みを受け継ぎ、発展させるものです。



アート・バーゼル

アート・バーゼルは、1970年にスイス・バーゼルのギャラリストたちによって設立されました。現在はバーゼル、マイアミビーチ、香港、パリ、カタールで開催され、モダンアートおよび現代アートを紹介する世界随一の美術展として知られています。

各展覧会は、主催する都市や地域ごとにユニークなもので、参加するギャラリー、展示作品、さらに各回ごとに現地の団体と共同で企画される併催プログラムの内容にその独自性が反映されています。

アート・バーゼルの活動はアートフェアの域を超え、「Art Basel App」をはじめとするデジタルプラットフォームの展開に加え、「Art Basel and UBS Global Art Market Report」、「Art Basel Shop」、「Art Basel Awards」など、アートの振興と発展を支えるさまざまなプロジェクトを展開。詳細は、artbasel.comをご覧ください。